

米軍横田基地

ホバリング訓練をするCV22オスプレイ（ともに筆者撮影）。

よした・としむろ ジャーナリスト。一九五七年生まれ。著書に「日米合同委員会の研究」「横田空城」「米軍基地問題」など。

世界 SEKAI 2021.9

増える。無人偵察機RQ4グローバルホークも一時配備されている（二〇二二年は六機が五月下旬から約五カ月間）。

横田基地は米国本土、ハワイ、グアム、日本、韓国などの米軍基地間で、兵員や武器弾薬などの物資を運ぶC5やC17など大型輸送機が頻繁に出入りする中継拠点だ。アジア・西太平洋地域の軍事空輸のハブ基地である。さらにKC10空中給油機、F16戦闘機、MC130特殊作戦機、RC135電子偵察機、米軍関係者用のチャーター旅客機など多くの機種が飛来する。二〇二二年からは航空自衛隊も共同使用し、航空総隊司令部と関連部隊が移設され、米軍との間に共同統合運用調整所も設置されている。

基地周辺の五市一町の人口は五十一万人を超える。一国の首都の人口密集地のただ中に、司令部まで置かれた巨大な外国軍基地があり、軍用機が騒音を放ちながら飛び交い、墜落や部品落下などの危険を伴いながら訓練を重ねるのは、世界的にも異例きわまりない。

二〇二二年七月八日、雨降る午後。横田基地のまわりをCV22オスプレイが一機、飛んでいた。周囲の市街地を制圧するかのよう上空低く、爆音を押しかぶせながら旋回する。ビルのぶ厚いガラス窓が振動でびりびりと震える。

雨雲を背に濃灰色の機影が、両翼端のローター（回転翼）を水平から垂直に切り替えながら、基地の滑走路中央へと

人口密集地の中の巨大基地

米空軍横田基地は、東京都西部の福生市、羽村市、瑞穂町、武蔵村山市、立川市、昭島市にまたがり、面積約七・一四平方キロ、全周約一四キロ。東京ドーム約一五〇個相当の敷地に、司令部棟、隊舎、管制塔、レーダー、格納庫、弾薬庫など各種施設が並び、南北に三三五〇メートルの滑走路を擁する。

米第5空軍司令部（横田・三沢・嘉納納各基地の部隊を指揮）、在日米軍司令部、在日米空軍司令部が置かれ、第5空軍司令官がほか二つの司令官も兼任する。第374空輸航空団、第730航空機動中隊、第21特殊作戦飛行隊、第753特殊作戦航空機整備中隊などが配属され、人員は二〇一七年当時で米軍人・軍属が約三九六〇名、それらの家族が約四三二〇名（二〇一八年度以降は非公表。『福生市と横田基地』福生市二〇二二年）。

常駐機は二〇二二年七月初めの時点で、C130輸送機（二四機）、CV22特殊作戦機オスプレイ（五機）、C12軽輸送・連絡機（三機）、UH1汎用ヘリコプター（四機）。二四年までにCV22が五機、追加配備される。二二年六月末に米陸軍横浜ノースドック基地に陸揚げされ、七月六日に横田に飛来したCV22が追加の一機となり、CV22は六機に

降下していく。いったん着陸するや、すぐに飛び立つ。タッチ・アンド・ゴーの訓練だ。次に、滑走路の東側を南北に延びる誘導路の真上を、高度十数メートルから数十メートルの超低空で往復し、タッチ・アンド・ゴーとホバリング（空中停止）の訓練を繰り返す。ローターの風圧で路面に水煙が立つ。

基地のフェンスにはりついて撮影していると、重苦しい爆音の波動が全身を揺るがす。フェンスぎりぎりに近づいてホバリングするとき、機体がいまにも電柱に触れそうに見える。墜落事故でも起きたらどうなるのかと背筋が寒くなる。フェンスのすぐ外側は、一般車両が行き交う生活道路。住宅や工場もある。荒々しい訓練は二時間ほど続いた。

「オスプレイの訓練は午後から夜間にかけてが多いです。私たち基地周辺の住民は長年にわたり、日常的に米軍機の騒音にさらされています。しかしオスプレイの場合は低周波で、また異質な不快感、圧迫感がつのる音なんです」

そう訴えるのは、昭島市在住の福本道夫さん（七二）である。基地周辺住民が米軍機の夜間・早朝の飛行差し止めと騒音被害への賠償を求めた「第九次横田基地公害訴訟」（原告二四四人）の原告団長を務めた。裁判で提出した原告対象のオスプレイ騒音被害アンケートには、「地響きのように家ごと揺れる」「部屋の中のガラス戸がびりびり鳴る」